NANZAN UNIVERSITY

２００８年度学長方針

南山大学の皆さん

学長　ミカエル・カルマノ

私は、大学で研究・教育を始めて以来、そのあるべき姿は、学生・教員・事務職員が協働するアカデミック・コミュニティ（academic community）であり、学生や教員の「知の創造」を支援する場であると考えています。このように私は、南山大学を、教員・事務職員に加えて学生の持つ潜在能力を十分に発揮できる場としていきたいと思います。

昨年度、神言会は来日 100 周年を、南山学園は創立 75 周年を迎え、この節目に合わせて「南山大学グランドデザイン」が策定されました。皆さんご存じのように、近年、社会からの期待に応えるべく、激しい競争が大学間で行なわれています。選ばれる大学とそうでない大学の二極化が想像以上の速さで進んでいます。「南山大学グランドデザイン」は、カトリック大学である本学だからこそ実現できる“One difference”(南山の独自性)の提供によってその存在感を名古屋から全国へ、ひいては世界に発信するための航海図です。私は、今年度より 3 年間、この航海図に沿った舵取りという重要な役割を担うことになりました。その責任の大きさに身の引き締まる思いですが、私がこの役割を果たすためには、アカデミック・コミュニティ南山を構成する皆さんの協力が不可欠です。学長就任にあたり、まず基本姿勢を明確にしたうえで、私の考えをお伝えします。

I. 基本姿勢

南山大学はその開学以来、文理融合の総合大学になることを目指してきました。2000 年に総合政策学部と数理情報学部が設置され、文理融合の総合大学としての一歩を踏み出しましたが、今後も、本学の強みである文科系のみならず理科系分野での更なる充実も目指したいと思います。

１．絶えざる自己改革・違いをもたらす内なる充実

マルクス前学長は、「絶えざる自己改革」というキーフレーズをよく用いられました。そ

の言葉どおり、マルクス前学長の在任期間においては、数多くの改革が皆さんの協力によって実現されました。マルクス前学長とともに、私も皆さんに深く感謝いたします。私は、学長就任にあたり、このキーフレーズに「違いをもたらす内なる充実」という一言を加えて継承したいと思います。その趣旨は、この改革を実のあるものとするため、アカデミック・コミュニティ南山を構成する皆さんが、個の力を充実させることにあります。とりわけ教員においては、研究と教育の両面、とくに研究面で、個の力を充実させていかなければなりません。残念ながら、それぞれの学部、個々の教員の業績を比較した場合、そこにははっきりとした差があるように見うけられます。背景に様々な事情があることはよく認識していますが、教員の皆さんの研究力がもっと高いものであることもよく知っています。教員の皆さんには、質・量の両面でより高い水準の業績を目指していただきますようお願いします。それぞれの学部においても、所属教員の研究・教育活動をより活発なものとするような取組について、ぜひ検討をお願いします。

ここで述べた「違いをもたらす内なる充実」が実現すれば、本学は「全国に輝く南山」となり、受験生や研究者にとって一層魅力のある大学となるでしょう。そのことは、さらなる「違いをもたらす内なる充実」につながり、「世界に輝く南山」にもつながっていくことでしょう。このようなプラス方向のサイクル（positive feedback）を軌道に乗せることが、「南山大学グランドデザイン」の実現にとって、必要なことです。

２.「南山大学グランドデザイン」の実現に向けて

「南山大学グランドデザイン」は、本学が世界から選ばれる大学となるための航海図であることは先にも述べました。そこでは、本学の建学の理念と教育モットーに基づくビジョンと中長期目標が掲げられています。本学のビジョンは、「人種、障がい、宗教、文化、性別など、様々な違いを認識し、多様性を前提とした人間の尊厳、他者の尊厳を大切にし、人々が共生・協働することで、新たな価値の創造に貢献する」というものであり、これを端的に表す「個の力を、世界の力に。」というキーフレーズが昨年度より南山大学の様々な広告にも掲げられています。このビジョンは必ず実現されなければなりません。そのために、グランドデザインを記した「南山大学における『20 年後の将来像』について（最終報告）」をあらためて精読し、アカデミック・コミュニティ南山を構成するすべての方々の共通理解にしてください。

このビジョンを実現するための中長期目標として、

1）研究面では「人間の尊厳を尊重し、推進するための先駆的研究を行い、学際的な共同研究の拠点として、新たな学問的価値を創出すること」、

2）教育面では「ユニバーサル受け入れ体制が確立し、ビジョンを実現した大学として、

世界から選ばれ世界に人材を輩出している大学になること」、

3) 社会貢献の面では「ビジョンを具現化する社会貢献の拠点として地元で最も愛される大学となること」

が掲げられています。これらの中長期目標をいかに達成していくか、これが私たちにとっての最重要課題です。今年度の学長方針も、そのような意識のもとで立案しました。これからも、大学執行部は責任を持ってこの課題に取り組んでいきますが、南山大学のすべての皆さんもこうした意識を共有し、日々の活動に従事してください。そして、「南山大学グランドデザイン」に対する認識と理解を深め、その実現のために知恵を出してください。

II. 最重要課題

研究と教育の両立は、高等教育機関としての大学に課せられた使命であり、南山大学もまた、研究機関であるとの認識を忘れてはなりません。大学における教育の前提は、言うまでもなく研究にあります。「研究を疎かにしない大学こそが優秀な学生を育成できる大学である」という、研究・教育機関としての本来あるべき姿を再認識し、その上で本学の長所を活かした独自性を追究していくことが重要です。

１.「南山の国際性」の強化

グランドデザインに謳われている、「世界から選ばれる大学」、「世界に人材を輩出できる大学」を実現していくためにも、研究・教育・社会貢献における「南山の国際性」の現状を真摯に捉え直し、その上で推進すべき課題を定め、戦略的な取組を実践していかなければなりません。このことの重要性は昨年度の外部評価委員会でも指摘されました。個の力を充実させるとともに、現有資産を活用して何ができるかをまず確認し、実現可能な施策を模索していくことが必要でしょう。学部生全員が一定期間外国で学ぶようなカリキュラムを持つ大学も増えています。例えば本学でも、総合政策学部の南山アジアプログラム（NAP）や外国語学部の実習科目以外に、そのようなプログラムを実現することが可能かどうか、各学部・教務課・国際教育センターという学内組織の連携の下で、是非とも検討をお願いします。また、マルチカルチュラルなキャンパスの構築に向けて、個の力を充実させることを前提に、どのような施策が可能か、各研究科・学部において検討してください。その際には、各研究科・学部と留学生別科との交流推進や、世界各地のカトリック大学との連携強化による「南山の国際性」の質的向上も視野に入れてください。

２．外国語教育のさらなる推進

2007 年度には、NNC（名古屋キャンパス）に「英語教育センター」が開設され、習熟度別クラス編成の全学的導入など、共通教育科目における英語教育プログラムの再構築が実現しました。10 月には、既に NSC（瀬戸キャンパス）で実績を積み成果を挙げてきたワールドプラザが NNC にも開設され、オープン後 3 ヶ月間の延べ利用者数が 5,000 名に上るほどの活況を呈しました。教室外での学生の自由で主体的な学習を支援していくために、語学学習用機器やスタッフの充実とともに、英語以外の言語の学習ニーズにも応えられるように、ワールドプラザのさらなる発展を目指していきます。

本学の教育が世界に通じるものとなるためには、各学部・学科レベルで、英語あるいは他の外国語を教授言語とする講義科目の導入を検討する必要があります。外国語学部においてはすでにかなりの割合でこれらの科目が実施されています。他の学部においても、最終的には一定程度（例えば 10%）の割合を確保するための積極的かつ具体的な検討を進めてください。そのために必要な FD（ファカルティ・ディベロップメント）や教育支援のあり方についても併せて議論を重ね、「外国語を学ぶ授業」に加え「外国語で学ぶ授業」の拡充を図っていくことが急務であると認識しています。

３．全学情報教育の検討

各学部において情報教育が推進されていますが、その内容に関しては、学部学科によって違いがあるようです。数理情報学部の場合、その専門性から現在のカリキュラムで十分ですが、他学部においては統一性、効率の観点から再検討が必要だと考えます。このような状況を踏まえ、IT 時代に応じたマルチメディア教育の仕組みを構築していくことも重要です。昨年度に設置されたマルチメディア教育ワーキンググループを中心として、情報倫理教育を基礎とした全学情報教育のあり方を、外国語教育ならびに図書館機能の統合も視野に入れて検討していきます。

III. 連携と社会貢献

１．小中高大連携における大学のあり方の検討

学園内における小中高大連携については、2005 年 4 月 1 日付「理事長基本方針」の「6. 南山学園内各学校の方向性：南山大学」において、大学が「南山学園内各学校の中心的役割を自覚し、連携教育に対しリーダーシップを発揮する」と述べられています。本年 4 月の南山大学附属小学校の開校によって、その役割の重要性がますます高まってきています。

「世界から選ばれる南山大学」である前に、まずは「学園内各単位校から選ばれる南山大学」であらねばなりません。そのための具体的施策について、各学部において検討してください。

学園内連携においては、教育・研究のみならず、課外活動や社会貢献活動などにおける連携も視野に入れる必要があります。小学校で実施されるアフタースクールにおいては、本学の在学生・卒業生の積極的な協力を前提に制度が作り上げられており、大学附属小学校ならではのものと考えます。今後さらなる協力体制を確立し、連携を深めていきます。

２．他大学、産業界との連携可能性

現在、名古屋大学等と共同で実施している教育プロジェクト「先導的 IT スペシャリスト育成推進プログラム」や、単位互換をはじめとする豊田工業大学との連携、愛知学長懇話会の単位互換制度などに見られるように、今後、他大学との連携で教育・研究を進めていくことが多くなると想定されます。各種 GP やグローバル COE に加えて、連携大学院等が構想可能かどうかを各研究科・学部において検討してください。

産学連携に関しても、一部の学部においては共同研究等の実績がありますが、さらに組織的、全学的に連携するための施策を各研究科・学部でも考えてください。

３．地域社会との連携

南山エクステンション・カレッジ、研究センター、人類学博物館による講座の提供や、大学コンソーシアムせとを通じた地域づくり事業への参画、などのこれまでの取組に加えて、昨年度は、開設間もない法曹実務教育研究センターがリーガルクリニック（無料法律相談）をスタートさせました。今後とも、このような様々な活動を通じて学外連携と地域社会への貢献を図っていきます。

名古屋アメリカ研究夏期セミナー（NASSS）における地域一般向け企画や 4 年目を迎える南山大学連続講演会なども、さらに継続し、これまでの知の蓄積を社会に還元していかなければなりません。

IV. 教育・研究

１．学生の「個の力」の充実

グランドデザインの具体化に向けて、個の力の充実が必要との認識を示しましたが、学生においては初年次導入教育、キャリア教育および学習支援の強化がその基礎となります。

近年、入学者の基礎学力は均一でなくなっていく一方です。グランドデザインの目標で

あるユニバーサル受け入れが実現した場合、入学者の学力に、より幅が出てくることは避けられません。学生にとって学部での 4 年間の学びをより充実したものとするためには、「How to」だけにとどまらない「考える力の涵養」を目的とした初年次導入教育プログラムが欠かせません。各学部で行なわれている初年次導入教育をさらに充実させていく必要があります。

昨年度、学生に将来の目標を持たせ、職業観を育てるためのキャリアサポートプログラムを企画・実施するための機関として、キャリア教育推進委員会とインターンシップ委員会を統合し、キャリアサポート委員会が設置されました。キャリアサポート委員会と支援室の積極的な取組によって、学生の将来に対する意識は以前に比べて高まってきました。本年度も、委員会を中心に、より良いキャリアサポートプログラムの全学的な企画・実施をお願いします。

「学び」に悩む学生を支援するために、昨年度両キャンパスに開設した学生相談窓口の機能充実を目指して、指導教員、学生委員、教務委員、カウンセラー、学生課、教務課、保健室、キャリア支援室などの連携を強化し、学生生活全般にわたる支援のさらなる充実にも取り組んでいきますので、協力をお願いします。

２．教員の「個の力」の充実

先に、個々の教員に求められる「違いをもたらす内なる充実」について、研究の重要性を強調しましたが、それとともに教育能力の向上も重要です。加えて、それらの能力を適切に評価することも重要です。

教育能力の向上については、まず、FD の重要性を個々の教員が再認識することが必要です。人任せになりがちな FD 活動を、教員一人ひとりが自分の問題として受け止め、不断に教育改善のための努力を行なう必要があります。自己点検・評価委員会ならびに FD 委員会が、そのための先導的役割を担い、FD 活動をさらに充実させることを期待しています。大学全体の教育力向上は、優秀な人材の輩出に結びつくと確信しています。

研究教育能力の評価については、昨年度、教員評価プロジェクトチームによる答申が提出され、教員の昇格に関する各学部の上乗せ基準も策定されつつあります。研究をはじめとして教育・社会貢献・大学運営などにおける教員の資質・能力・実績などの検証を継続的に行ない、それらの改善・向上を目指すための取組を今後も継続していきます。

３．組織の力の充実

昨年度は、人文学部と人間文化研究科の取組が文部科学省「専門職大学院等教育推進プログラム」に、数理情報研究科の取組が文部科学省「オープン・リサーチ・センター整備

事業」に、それぞれ選定されました。今後とも、学内から応募のあった取組を、文部科学省等による各種の支援プログラムに申請する予定です。先に述べた教員の「個の力」の充実は、科学研究費等の競争的外部研究費の獲得にもつながります。そして、それらの積み重ねが、グローバル COE や特色 GP などの組織としての競争的資金獲得に結びつきます。これらの組織的かつ恒常的な申請に向け、支援体制を充実させていきます。

数理情報研究科は名古屋大学等との連携やオープン･リサーチ･センター等の事業を積極的に実現させてきましたが、「I. 基本姿勢」で述べた理科系分野の充実を体現すべく、数理情報学部をさらに魅力的なものにするための具体的施策の検討をお願いします。

V. 入試と広報

世界から選ばれる南山大学であるためには、優れた研究と教育の実践を通じて「全国に輝く南山」を確立すると同時に、本学の“One difference”を社会にいかに知らせるか、ということが重要です。そのための制度と広報について、最後にまとめます。

１．志願者数確保と入試制度

首都圏や関西方面の有力大学が名古屋に試験会場や入試相談窓口を設けるなど、中部地方の受験生獲得をめぐる熾烈な競争が続く中、2008 年度入試における本学の志願者数は 22,191 名で、過去最高を更新しました。18 歳人口の漸減が続く中、4 年連続で志願者数を増やせたことは、オープンキャンパスや高校訪問をはじめとする地道な入試広報活動等の成果であり、教員・事務職員の皆さんの協力に感謝します。

これまでに、全国入試やその後のセンター併用マルチ入試（センター50）などの新たな入試制度の導入を通して、全国各地の受験生獲得に向けた積極的な取組が行なわれてきました。しかしながら、現状を見る限り、地方における本学の認知度や受験生に対する魅力が高まったとは言いがたく、新たな方法で、「全国に輝く南山」を実現していく必要があります。入試制度と広報（入試広報・大学戦略広報）の連携・統合の検討が喫緊の課題です。入試制度の検討はこれまでも継続的に行なわれてきましたが、今年度は、グランドデザインで提示された、学生受け入れにおける地域・年齢・国籍などの幅を広げる「ユニバーサル受け入れ」を実現するための制度作りに着手したいと考えています。具体的には、カトリック系高等学校等推薦入学審査や外国人留学生入学審査、社会人入学審査などの再検討、入試における成績優秀者への特別奨学金支給制度の導入など、入試制度のさらなる改革に努めていかなければなりません。より良い解決策を見出すために、外部の専門家や専門機

関の意見を積極的に採り入れ、幅広い視野からの検討が行なわれるよう期待しています。

それぞれの学部・大学院においても、志願者数確保に向けてどのような取組が必要かについてあらためて議論し、これまで以上に努力を重ねるようお願いします。

２．入試広報と大学戦略広報

入試広報については、オープンキャンパス、保護者のためのオープンキャンパス、バスツアー、体験入学会、高校教員対象説明会、高校訪問、模擬授業などの活動は一定の成果を上げてきましたが、さらなる志願者増を目指して、入試広報と大学戦略広報を有機的に連携させる必要があります。そのために、積極的に外部の専門家や専門機関の意見を採り入れ、広報のあり方を長期的な視点に立って検討していきます。